文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

第29号／令和4年6月24日発行

小石川植物園逍遥　―白山御殿跡・今昔―　2

杉田直樹と仲間たち　小酒井不木と斎藤茂吉と　4

館蔵資料紹介『TOKYO AND ITS UNDERTAKINGS』　6

令和3年度のあゆみ　7

資料をご寄贈くださった方々　8

令和4年度の催し　8

▲宮川春汀「東京名所図絵　植物園」（館蔵）

小石川植物園逍遥
―白山御殿跡・今昔―

小石川植物園の歴史と文化

東京大学大学院理学系研究科附属植物園（以下、一般的な呼称である小石川植物園で標記）。

東京の都心部に隣接する文京区にあって、総面積は約16万㎡を測り、洪積台地の平坦部～斜面、沖積低地へ連続する地形に占地し、有数の自然環境となっています。

明治10年（1877）に帝国大学（現・東京大学）の所管となって以降、精子発見のイチョウの木や、万有引力発見の契機となったニュートンのリンゴの木などに代表される様に数多くの理科学系の学術研究の歴史が凝縮されています。それ以前の江戸時代当時は、徳川幕府直轄の御薬園として様々な薬草が栽培され、飢饉への備えとして本草学者の青木昆陽が南九州以外の土地で甘藷（さつまいも）の試作に取り組んだ場所でもあり、園内には甘藷の形を模した記念碑も置かれています。関東大震災時には市民の避難所にもなりました。

甘藷栽培記念碑

関東大震災記念碑

更に時代を遡れば植物園所在地には、後に徳川幕府第五代将軍綱吉となる徳川徳松の屋敷、白山（小石川とも）御殿が置かれていました。地誌の記載によれば、白山御殿の周囲は十間（約18ｍ）幅の堀で囲繞されていたと記されています。近年の植物園内と周辺地域の発掘調査で、この堀の跡が複数地点で確認されました。白山御殿が置かれる以前には、後に近隣地域に遷座された白山神社や簸川神社、他社に合祀された女体神社が存在していたとも伝わります。

植物園内や隣接地域の発掘調査ではまた、縄文時代の貝塚や、弥生時代の集落遺跡なども確認されており、多種多様な歴史と文化の複合体であると言っても過言ではありません。

小石川養生所の赤ひげ

御薬園跡は明治政府が上地した後に、東京府から文部省へ管轄替えとなり、帝国大学所管となる過程で、小石川植物園は研究施設でありながら一般市民にも公開され、寺田寅彦や樋口一葉、森林太郎など、数多くの文学者たちが各々の作品の舞台として取り上げてきました。

「その門の前に来たとき、保本登はしばらく立停って、番小屋のほうをぼんやりと眺めていた。宿酔で胸がむかむかし、頭がひどく重かった。“ここだな”と彼は口の中でつぶやいた、“小石川養生所か”（中略）

一人の青年が来て、門のほうへゆきながら、振り向いて彼を見た。服装と髪のかたちで、医師だということはすぐにわかる。登はわれに返り、その青年のあとから門番小屋へ近づいていった。彼が門番に名を告げていると、青年が戻って来て、保本さんですかと問いかけた。彼はうなずいた。（中略）

津川は登をうながして歩きだした。南の病棟にそっていくと、横に長く二百坪ほどの空地があり、その向うは柵をまわした薬園になっていた。ここは元来が“小石川御薬園”といって、幕府直轄の薬草栽培地であり、一万坪ほどの栽園が二つ、道をはさんで南北にひろがっていた。養生所は南の栽園の一部にあるのだが、このあたりは高台の西端に当たるため、薬園の高いところに立つと、西にひらけた広い展望をたのしむことができた。（中略）俗に施薬院といわれるこの養生所の支配は“肝煎”といい、小川氏の世襲であって、幕府から与力が付けられていた。小川氏はべつに屋敷があるが、表の建物にその詰所があり、そこで与力と共に会計その他の事務をとっていた。そのころ、番医の定員は五人で、これらの詰所は病棟のほうに属し、表の建物とは渡り廊下でつながっていた。」（山本周五郎『赤ひげ診療譚』より抜粋）

江戸時代を背景とした人情噺においては他の追随を許さぬ山本周五郎氏によって描き出された、若き蘭学医師を主人公とする『赤ひげ診療譚』は、映画やTVドラマとして幾度となくリメイクされる不朽の名作となっています。

園内に遺る小石川養生所ゆかりの井戸跡

植物園文学さんぽ

「数うれば、はや九年前なり。高峰がそのころはまだ医科大学に学生なりしみぎりなりき。一日予は渠とともに、小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅の花盛んなり。渠とともに手を携え、芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞りて、咲き揃いたる藤を見つ。歩を転じてかしこなる躑躅の丘に上らんとて、池に添いつつ歩めるとき、かなたより来たりたる、一群れの観客あり。（中略）

かくて丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されどただ赤かりしのみ。（中略）

予は高峰とともに立ち上がりて、遠くかの壮佼を離れしとき、高峰はさも感じたる面式にて、“あぁ、真の美の人を動かすことあのとおりさ、君はお手のものだ、勉強したまえ”

予は画師たるがゆえに動かされぬ。行くこと数百歩、あの樟の大樹の鬱蒼たる木の下陰の、やや薄暗きあたりを行く藤色の衣の端を遠くよりちらとぞ見たる。」(泉鏡花『高野聖』所収の「外科室」より抜粋)

小石川植物園が数多くの作品の舞台とされたのは、単に緑豊かな動植物の宝庫であるだけにとどまらず、創作意欲を抱かせる魅力があるからに他なりません。それは絵画や写真という媒体にもおいても記録の対象となってきたことが明らかにしています。時には帝国大学の卒業記念の集合写真の場として、また講演会場として利用されることもありました。

「日清戦争の初めの年明治二十七年、仙台から初めて出京して東京帝国大学英文科に入った。文学部長は我々が大入道と綽名(あだな)した外山博士であった。井上哲次郎博士が独逸から六年余の留学を卒え、帰朝して万丈の気焔を吐いたのも其頃である。翌年所謂赤門文学『帝国文学』(月刊)が創刊された。第一号に序を書いたのは高山樗牛であった。(中略)『帝国文学』は又時々名士を聘して講演を開いた。其何回目かに矢野龍渓、福地桜痴のを私が聴いたのは小石川植物園に於てであった。」(土井晩翠『新詩発生時代の思ひ出』より抜粋)

土井晩翠もまた、小石川植物園内で様々な動植物に接することによって、唱歌“荒城の月”を始めとする作詞の創作の着想を得ていたのかも知れません。

永井荷風は近年、優れた都市観察者と再評価されており、『日和下駄』では東京都心部の景観の激変ぶりを惜しみました。

「東京市中散歩の記事を集めて『日和下駄』と題す。そのいわれ本文のはじめに述べ置きたれば改めてここに言わず。『日和下駄』は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雑誌『三田文学』に連載したりしを、この度米刃堂主人のもとめにより改竄して一巻とはなせしなり。ここにかく起稿の年月を明にしたるはこの書板成りて世に出づる頃には、篇中記する所の市内の勝景にして、既に破壊せられて跡方もなきところ尠からざらん事を思えばなり。見ずや木造の今戸橋は蚤くも変じて鉄の釣橋となり、江戸川の岸はせめんとにかためられて再び露草の花を見ず。桜田門外また芝赤羽橋向の閑地には土木の工事今まさに興らんとするにあらずや。昨日の淵今日の瀬となる夢の世の形見を伝えて、拙きこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならばなれかし。」と宣言しています。そして小石川植物園内の樹木についても、同書中で言及されています。

「小石川植物園内の大銀杏は維新後危うく伐り倒されようとした斧の跡が残っているために今ではかえって老樹を愛重する人々の多く知る処となっている。東京市中にはもしそれほどの故事来歴を有せざる銀杏の大木を探り歩いたならばまだなかなか数多いことであろう。」(『日和下駄』より抜粋)

荷風は小石川植物園周辺地域についても随筆を著しました。

「旧交を追想して歩を移すほどに、いつしか白山御殿町を過ぎ、植物園に沿いたる病人坂に出づ。(中略)その頃植物園門外外の小径は水田に沿いたり。水田は氷川の森のふもとより伝通院兆域のほとりに連り一流の細水潺々としてその間を貫きたり。これ旧記にいうところの小石川の流にして今はわずかに窮巷の間を通ずる溝坑となれり。ああ四十年のむかしわれはこの細流のほとりに春は土筆を摘み、夏は蛍を撲ちまた赤蛙を捕えんとて日の暮るるをも忘れしを。赤蛙は皮を剥ぎ醤油をつけ焼く時は味よし。」(『礫川倘洋(しょうよう)記』より抜粋)

文学作品中の異色作としては、推理小説が挙げられます。

「神津恭介といえば、いま日本でも、ならぶ者がないと言われた名探偵の一人であった。一高から東大医学部に進んで法医学を専攻し、終戦後、偶然の機会で、実際の犯罪捜査に手を染めたかと思うと、たちまちいくつかの怪事件、難問題を解決し、その名声は、とたんに天下に轟きわたった。(中略)東山植物園――。これは動物園とともに、名古屋の一つの誇りであった。東京小石川の植物園が、戦禍のために、荒廃しきった今日もさいわいにこの植物園は空襲の惨禍も逃れ、施設も中の植物も昔のままに、訪れるひとびとの眼を喜ばせていた。」(高木彬光『神津恭介、犯罪の陰に女あり』所収「血ぬられた薔薇」より抜粋)

「東京帝国大学理科大学附属植物園」『新撰東京名所図会』より(当館所蔵)

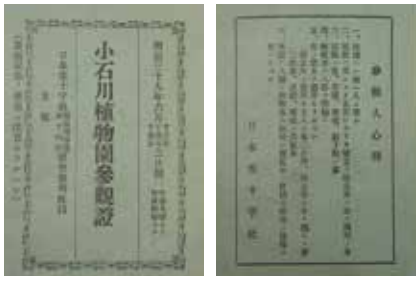
小石川植物園に親しむ

日本赤十字社主催の植物園見学会や、かつて近隣に所在した療養施設の入所者の散策など、小石川植物園は心と体を癒す療養所的な場所として利用されることもありました。こうした事も、小石川植物園の歴史を語る上で見逃す事はできません。

小石川植物園は、歴史的・文化的価値が評価され、平成24年に国指定名勝および史跡となりました。

今年度の特別展では、名勝および史跡指定10周年を迎えた小石川植物園の歴史や文化、そして逸話について紹介します。

(加藤　元信)



「日本赤十字社　小石川植物園参観證」(当館所蔵)

杉田直樹と仲間たち
小酒井不木と斎藤茂吉と

杉田直樹（1887-1949）は、本郷区駒込西片町（現、西片一）に長く住んだ文京ゆかりの精神病学者です。杉田は、誠之小学校、郁文館中学、第一高等学校、東京帝国大学医科大学と、ここから本郷の学校に通いました。明治 41 年（1908）に入学した医科大学では、精神病学教室の呉秀三教授、三宅鑛一助教授の下で学びました。杉田は早くから非凡な才能を発揮し、明治 43 年に出版された三宅の『通俗病的児童心理講話』では、序文で三宅が「速記を、杉田直樹君が編輯整理せるもの」と記して、出版に杉田が協力したことを書いています。また附録第二として収録された「児童智力発達の標準」は、フランスのビネーが考案した知能検査法を初めて翻訳して日本に紹介したものとして知られていますが、凡例によれば杉田が翻訳して抄録したものだそうです。医科大学の同級生で、同じく精神病学を志していた浅田一（法医学者、1887-1952）によれば、大学在学中から小石川区駕籠町（現、本駒込二）の巣鴨病院内におかれた精神病学教室に出入りし、先輩の斎藤茂吉（1882-1953）から小言を言われることもあったそうです。

【写真1】
杉田直樹（1887-1949）

【写真2】大正4年　東京市養育院の風間・石川送別会写真（部分）
（椅子に座った前列左端が浅田、隣が杉田、後列左端が茂吉）

子どもの頃から文学に興味を持っていた杉田は、一高在学時には谷崎潤一郎らと共に『校友会雑誌』の編集をおこない、そこに和辻哲郎の原稿を掲載するなどしていました。また大学時代には、谷崎、和辻らが発行した第二次『新思潮』（明治 43 年頃）に客員として関わり、２号に「オットオ・ワイニンゲル」と題する一文を寄稿しています。学者となった後も、医学雑誌に専門的な研究論文を発表するかたわら、一般誌に医学に関する記事やコラムを数多く発表しました。

医学生、小酒井光次（不木）との交遊

浅田の第三高等学校の後輩、小酒井光次（病理学者、1890-1929）は、小酒井不木のペンネームで多くの作品を発表し、江戸川乱歩のデビュー作「二銭銅貨」を激賞した人物としても知られています。浅田は、大正 14 年（1925）に乱歩を中心に大阪で結成され、不木や横溝正史も参加した「探偵趣味の会」に遠く長崎から参加するなど、生涯を通じて不木と親しく交流しました。明治 43 年に上京して医科大学に入学した不木は、浅田の紹介で杉田とも交流するようになります。不木は、大学２年頃は小石川区第六天町（現、小日向一）に、大学３年以降は本郷区駒込動坂町（現、本駒込四）に下宿した、文京ゆかりの作家の一人です。

【写真３】の杉田宛葉書は、不木が伊豆山温泉相模屋（現、静岡県熱海市）から出したものです。休暇前の無沙汰を詫び、体の調子を狂わせたので相模屋で 10 日間ほど静養する予定だと書かれています。相模屋は、谷崎をはじめとして、明治 40 年代には杉田の友人たちが多く訪れた宿でした。杉田の手元には、相模屋に止宿する友人たちだけでなく、旅館や、時には相模屋の女中からも手紙が届き、来館した仲間たちの様子が伝えられているほどです。

【写真3】杉田宛
小酒井不木葉書（表面）

相模屋に宿泊した当時のことを不木は、随筆「アルカシヨンの思い出」で回想しています。そこには、「大学の三年級の夏休みに伊豆山へ軽い神経衰弱を養ひに行った時は楽しかった」と書かれています。これによると、不木が相模屋に宿泊したのは大正２年７月始めとのことなので、「五日」とあるこの葉書は、同年７月５日のものと思われます。葉書には、「孤独の旅」なので「面白いことがあらばお知らせ下さい」と書かれていますが、後に女性が宿に不木を尋ねてきて、短い期間ながら一緒に宿泊したことが回想されています。

東北帝国大学への就職が決まった不木は、大正６年 12 月、杉田と同門の精神病学者で長崎医学専門学校教授の石田昇らと共に、アメリカ留学の途につきました。留学中の不木の日記には、先に留学していた杉田と再会し、共に語りあったり（「今日朝から晩まで杉田君と語る」大正７年３月４日）、乱歩のペンネームの由来にもなったエドガー・アラン・ポーの墓を見物する（「午後杉田君、松本氏と三人して Allan Poe の墓、Scott Key の Monument などを見る」同年３月６日）など、親しく行

動を共にしたことが記録されています。日記によれば、不木は石田とも親しく交流しており、時には杉田や石田と共に、友人を尋ねることもあったようです。

医学者、斎藤茂吉との交流

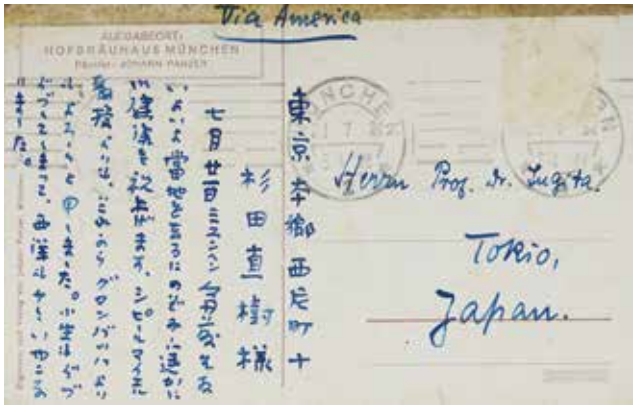
石田が留学するにあたって、代わりに長崎医専で教鞭を執ることになったのが、斎藤茂吉でした。留学中の石田は、ジョンス・ホプキンス大学のメイヤー教授の下で研究をしていましたが、大正 7 年 12 月 21 日、研修中の病院で同僚を射殺するという事件を起こしました。当時の杉田の日記によると、石田の事件が日本に伝えられると、アメリカから帰国したばかりの杉田と石田の後任の茂吉が、呉教授からアメリカとの交渉役に指名されたようです。二人は、石田の手紙を英訳して、精神鑑定を担当したメイヤー教授宛に送ることなどを相談しています。大正 14 年に、石田はアメリカから杉田が勤める松沢病院に移送され、昭和 15 年（1940）に同病院内でなくなりました。茂吉の日記には、石田を見舞に何度も松沢病院を訪れたことなどが記録されています。

茂吉の後輩にあたる杉田ですが、研究者としては茂吉からおおいに頼られる存在でした。大正 10 年にヨーロッパに留学した茂吉は、妻の従弟で当時医科大学研修生だった青木義作に宛てた手紙で、「先づ呉先生と杉田君等の信用を得る必要がある」（大正 11 年 12 月 20 日付）など、研究上では杉田を頼るように指示する手紙を何通も出しています。

【写真4】ウィーンからの杉田宛斎藤茂吉、井村忠太郎葉書（裏面）

大正 11 年 4 月 11 日付の葉書【写真 4】は、茂吉が留学生仲間の井村忠太郎と連名で、ウィーンから杉田に贈った絵葉書です。裏面に茂吉は、「明日は井村君とスタインホーフを見物にまゐる予定に御座候」と書き、ウィーン近郊のスタインホーフ精神病院を訪ねる予定を報告しています。帰国して新宿脳病院を継いだ井村は、青山脳病院を継いだ茂吉の同業者として、茂吉の日記にも度々登場しています。この一ヶ月後に茂吉は、帰国後に長崎医専に勤務することになる浅田をウィーンに迎えました。浅田は、長崎医専就職について茂吉に相談し、「大火なく地震なく人情醇厚だから是非来い」と言われて赴任を決めたそうです。長崎医専では、茂吉が兼任していた法医学の講座を担当し、大正 14 年からは兼任で精神病学の講座も担当しました。

その後茂吉はミュンヘンに移り、杉田も学んだスピールマイエル教授の教室で学びました。それに先だって茂吉がミュンヘンを見学した際には、「貴下の座りたるあの椅子によりて再び予輩と共に当研究所にて学ばるるの機を得べし」（杉田訳、『神経学雑誌』22 巻 3 号掲載）と、茂吉がミュンヘンに転学するであろうと予想した手紙が、スピールマイエルから杉田に送られています。



【写真5】ミュンヘンからの杉田宛斎藤茂吉葉書（表面）

7 月 21 日付の葉書【写真 5】は、大正 13 年に長かった留学を終える茂吉が、ミュンヘンを立つ前日に杉田へ書いたものです。研究室のスピールマイエル教授（文中「シピールマイエル」）と技術員グロンバッハ夫人からの言葉を伝える一方で、「小生もぐづぐづしてしまって、西洋も少々いやになりました」と、留学を終える心境を伝えています。葉書には、「HOFBRÄUHAUS MÜNCHEN」と印字されています。これは現在も残るミュンヘンの有名ビヤホール、ホフブロイハウスのことで、前日に留学生仲間たちが、茂吉の送別会を開いたお店です。茂吉は、送別会の際にこの葉書を購入し、翌日この手紙を書いたのでしょう。

昭和 24 年 8 月末、杉田の訃報に接した茂吉は、同時期に詠んだ「強羅雑歌」に、「同学（どうがく）の杉田直樹（すぎたなほき）の死したるは　この老身（らうしん）いなづまに打たれしごとし」の一文を残しています。下級生ながら、共に長く精神病学にかかわってきた仲間を失った茂吉の、強い喪失感が感じられる一文です。

茂吉は、文京区域に居住した期間こそ長くはないものの、編集発行に関わった雑誌『アララギ』の編集所が小石川にあったことから、「富坂にて」などの歌を残している文京ゆかりの作家でもあります。

令和 4 年度の収蔵品展では、杉田家から文京区に寄贈された資料を中心に、誠之小学校同級生で詩人の江南文三、一高時代からの友人で小説家の谷崎潤一郎、同じく一高時代からの友人で倫理学者の和辻哲郎、ここで紹介した小酒井不木と斎藤茂吉など、杉田直樹とその仲間たちとの交流を紹介する予定です。

（加藤　芳典）

館蔵資料紹介
『TOKYO AND ITS UNDERTAKINGS』

この本は、昭和４年（1929）年に、東京市が発行した写真集です。表紙には八重桜が印刷され、タイトルの文字は金色です。内容は、「Imperial Palaces　宮城」「Municipal Undertakings　東京市施設及事業」「View of City　市内雑観」に分かれ、東京の景色や施設が約 200 ヶ所、紹介されています。この写真集に日本語のタイトルはありませんが、訳するならば「東京とその施設及事業」でしょうか。目次は英語、写真のキャプションは英語と日本語の並記です。東京市が発行した写真集に英語が使われているのは、同年の英国王室のグロスター公爵（エリザベス女王の叔父）の来日に合わせて編纂されたためと考えられます。献辞には、当時の東京市長堀切善次郎が、日本を訪れた公爵にこの写真集を捧げる旨が、英語で書かれています。この写真集には、聖橋、大塚公園、根津神社、護国寺など、現在、文京区にあたる場所も紹介されています。

公爵は、５月２日に軍艦サフォークで横浜港に到着し、９日まで東京に滞在した後、日光、箱根、京都、奈良、岐阜、鎌倉などを訪ね、23 日に帰国しています。在京中は、宮中晩餐会、園遊会、大臣邸への訪問など様々な儀式や行事が催されました。５月４日には東京帝国大学を訪れ、ロンドンの日本協会から贈られたシェイクスピア・メダルを小野塚総長に伝達し、大学を視察しました。現在の本郷通りでは本郷区内の小学生、大学の正門から先は帝大生が並び、小雨の降る中、公爵を出迎えたそうです。

『TOKYO AND ITS UNDERTAKINGS』表紙

東京帝国大学　Tokyo Imperial University,Hongo

５月２日の東京市会では、公爵への歓迎文が満場一致で可決され、堀切市長名で公爵に贈られることになりました。また、同日発行の『東京市公報』「グロスター公殿下をお迎えして」によると、東京市では、市長を始め様々な団体の代表が公爵を出迎え、市内電車など各所での国旗掲揚、青年団などの提灯行列などが歓迎行事として予定されていました。５月 14 日『東京市公報』によると、公爵は堀切市長を宿泊していた霞ヶ関離宮に招いて「御下賜品」を贈っています。また、23 日の記事では、東京市の慈善事業に対し 300 ポンドの寄付をしたことがわかります。東京市では、軍艦サフォークの乗組員に対し、市内電車の無料乗車、興行の無料観覧、市施設大観贈呈をしています。また、５月２日の『東京朝日新聞』夕刊でも、東京市の公爵歓迎について取り上げ、行事を紹介しています。さらに、乗組員に市内電車の無料乗車、興行の無料観覧と東京市写真帳の贈呈が行われるとあります。東京市では、公爵だけでなく、乗組員も歓待したことがわかります。また、乗組員に贈呈された市施設大観（『東京市公報』）と東京市写真帖（『朝日新聞』）は、同じ物と考えられます。この他に、東京市の歓迎に関する詳しい記録が確認できないためはっきりしませんが、『TOKYO AND ITS UNDERTAKINGS』は、乗組員に贈られた市施設大観、東京市写真帳かもしれません。

（齊藤　智美）

令和3年度のあゆみ

企画展

「コンドル博士と岩崎家四代－101年目の和魂と洋才－」
◆4月3日(土)～4月24日(土)(延べ19日間)　入館者数……802人

開館30周年記念 収蔵品展

「小石川をめぐる－資料でみる名所－」
◆6月19日(土)～7月25日(日)(延べ32日間)　入館者数……1558人

小･中学生のための歴史教室

ホームページを開こう!－夏休み歴史館クイズ－
◆7月20日(火)～8月31日(火)(延べ43日間・月曜日を含む)

開館30周年記念 特別展

「完全公開　巻物　八景十境－ぶんきょうの指定文化財－」
◆2月5日(土)～3月21日(月・祝)(延べ39日間)　入館者数……3121人

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト
応募総数253人
11月14日(日)
課題作家：芥川龍之介、伊藤左千夫、田山花袋、永井荷風、
夏目漱石、樋口一葉
会場：跡見学園女子大学ブロッサムホール
本選出場者……16人　観覧者数……107人

◆歴史講演会
「金田一京助の仕事と文京区」／金田一秀穂氏(金田一京助令孫・杏林大学教授)
12月12日(日)
会場：文京区民センター　参加者数……76人

◆史跡めぐり
「文化人ゆかりの地　本郷界隈を巡る」
12月2日(木)　参加者数……23人

ミニ企画

◆6月1日(火)～7月31日(土)「文の京の五輪列伝」
◆1月7日(金)～4月24日(日)「文京ゆかりの知の巨人 吉本隆明の愛した猫(とら)達」

史跡めぐり

◆第1回　6月30日(水)治五郎さんぽ～嘉納治五郎ゆかりの史跡をたどる～
参加者数……15人

◆第2回　2月25日(金)『八景十境の世界』千駄木・太田ヶ原界隈を巡る
参加者数……24人

◆第3回　3月23日(水)早春の日光御成道を歩こう～追分一里塚から西ヶ原一里塚まで～
参加者数……25人

ワークショップ

「みんなの名所ものがたり　まちを写す・未来を選ぶ　よみとる・えらびとる　文京・音羽篇」
◆webによる場所の価値およびものがたりの収集
募集期間2月10日(木)～2月28日(月)
投稿者数……6名　集まった情報……12

◆ワークショップの実施　3月13日(日)　参加者数……5名

※新型コロナウィルスの流行に伴い、4月25日(日)～5月31日(月)は休館、事業は中止
※展示室等空調改修その他工事に伴い、8月16日(月)～1月6日(木)まで休館

企画展

収蔵品展

特別展

歴史講演会

ミニ企画

史跡めぐり

令和4年度の催し

※それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にて、お知らせします。
ホームページ：https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/

新型コロナウイルス感染症防止対策のため、展示及び事業の日程及び内容に変更・中止が生じる場合があります。最新情報は文京区ホームページでお知らせします。

小・中学生のための歴史教室
「ブンタを探せ!ー展示室をスミからスミまで探検しようー」
7月16日（土）～8月31日（水）
館内の展示を見て答えるクイズを実施します。事前申込不要、参加者には記念品を贈呈。

特別展
「小石川植物園異聞―白山御殿跡いま・むかし―」
10月29日（土）～12月11日（日）
国指定名勝及び史跡「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」の歴史や文化、逸話を紹介します。

特別展記念講演会
「小石川植物園の植物学研究（仮）」
12月4日（日）会場：文京区民センター
講師：川北篤氏（東京大学教授、小石川植物園長）
定員：100人（予定）、要事前申込（申し込み方法、時期は、区報やホームページなどでお知らせします。）

史跡めぐり
歴史館友の会まち案内ボランティアが、文京区の文化人に関連した地域や史跡等をご案内します。
年3回実施予定。要申込（往復はがき、又は電子申請（区ホームページ））。
参加費：保険料・入館料等実費。

レファレンス（地域学習サポートコーナー）【現在休止中】
毎月第2・4木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて、ご質問にお答えします。

収蔵品展
「杉田直樹と仲間たちー文三、潤一郎、哲郎、不木、茂吉ー（仮）」
2月11日（土）～3月19日（日）
西片に住んだ精神病学者杉田直樹と友人である文京ゆかりの文人たちの交流を紹介します。

文化人顕彰事業　歴史講演会
文京ゆかりの文化人に関する講演会を予定しています。区報等で募集します。

文化人顕彰事業　朗読コンテスト
本選 11月13日（日）13時～16時
会場：跡見学園女子大学ブロッサムホール
文京ゆかりの作家の作品を朗読。今年の課題作家は、森鷗外です。コンテスト形式で優秀者を選び表彰します。
※参加者・観覧者募集の方法等は、ホームページなどでお知らせします。

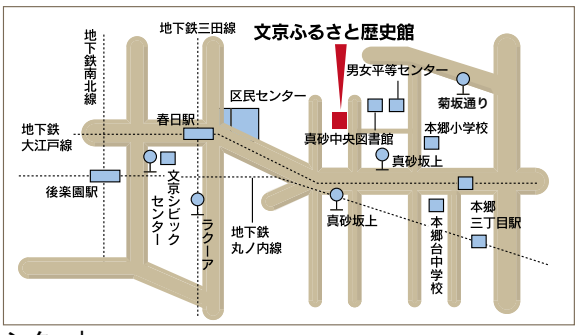
文化人顕彰事業　史跡めぐり
9月頃実施予定　要申込（往復はがき又は、電子申請（区ホームページ））。
参加費：保険料・入館料等実費。

ワークショップ
実施日：未定
会場：未定

常設展示ボランティアガイド【現在休止中】
歴史館友の会常設展示ボランティアガイドが、毎週土・日曜日、13時から17時まで常設展示の解説を行います（申込不要・無料）。上記日時以外のご希望も受付けています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

利用のご案内

◆開館時間：午前10時から午後5時まで
◆休 館 日：月曜日・第4火曜日（休日にあたるときは翌日）
くんじょう期間、年末年始
◆入 館 料：一般個人100円、団体（20人以上）70円
中学生以下・65歳以上無料
＊特別展は別に定めます
◆交　　通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスＢーぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分「菊坂通り」から徒歩6分



文京ふるさと歴史館

◆ホームページ：https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/　〒113-0033　東京都文京区本郷四丁目9番29号　電話(03)3818-7221

印刷物番号 D0121056